考古學論攷　第 48 号 31-44 頁 , 2025 年 3 月

使用方法からみた近畿地方における古代絵馬祭祀

前　田　俊　雄[i)]

要旨　本稿ではおもに使用方法の面から、近畿地方における古代絵馬祭祀の実態について検討をおこなった。
絵画資料から確認できる絵馬祭祀の諸形態について、出土史料に残された痕跡からその使用法が追認されるのか、その実態を検討した。また遺跡での出土状況についても、あらためて再検討をおこなった。そしてこれらをもとに、近畿地方における絵馬祭祀を類型化し、その展開について検討した。

古代において絵馬祭祀は、８世紀前半に宮都およびその周辺で執りおこなわれるようになる。その内容は溝や流路などの開かれた空間に祭祀の場を設け、最終的にその場で絵馬を投棄し、流す祭祀である。この絵馬祭祀は、使用される絵馬の図像や祭祀内容の共通性から、「都城型絵馬祭祀」としてひとつの絵馬祭祀の様式としてくくることができる。

一方、８世紀後半に入ると、早くも絵馬祭祀には変化がみられるようになり、その後９世紀に入ると、絵馬祭祀は大きく変化する。従来の祭祀形態に加えて、絵馬は祭祀終了後に祭祀の場所に投棄するのではなく、あらためて別場所の廃棄土坑などに廃棄されるようになる祭祀があらわれる。そしてこの２つの絵馬祭の形態は、前者が姿を消し、後者が一般的なものへと変化する。

このように近畿地方における古代絵馬祭祀は、８世紀前半に宮都で生み出されて以降、一定の規範をもったかたちで周辺へと広まっているが、短期間でその規範は崩れる。また祭祀のおこなわれる場所についても、宮都周辺では絵馬祭祀は下火となり、代わってその周辺で挙行されるようになる。

キーワード　出土絵馬、使用方法、出土状況、「都城型絵馬祭祀」

Ⅰ．はじめに

絵馬祭祀は、日本古来の祭祀のひとつである。絵馬研究は、おもに社寺に奉納されたものを対象に、民俗学の立場から、その心象を中心に進められた。そこで古代の生馬献上が簡略化し、馬形献上の風習が生まれ、そこから絵馬が誕生するとされる（岩井 1974）。この見解は現在に至るまで、一定以上支持されている。

その後、出土絵馬の事例が増加するに従い、出土史料に基づく研究が進展する。伊場遺跡で出土した古代の絵馬は、当時知られていた最古の絵馬（秋篠寺例、當麻寺例）をはるかに遡るものとして注目され、殺馬祭祀および絵馬祭祀が、殺牛祭祀を中心とし漢神祭祀に関連するという意見が出された（水野 1978）。その後「律令的祭祀」の観点から、絵馬を大祓の祓具のひとつとして、律令国家の祭式に取り入れられたという位置づけがなされる（金子 1985、水野 1983 など）。また難波宮や平城京を中心として出土する一定の規範に則った初期の絵馬を、「都城型絵馬」とする意見も出されている（江浦 2006）。このように 1970 年代以降絵馬研究は、考古学の立場から、基礎史料となる絵馬の出土とともに深化してきたことがわかる。

これらの研究を踏まえ、絵馬の図像に中国大陸からの影響を想定するとともに、使用の面では懸けるものと挿し立てるものの２種類が存在し、地域によってその使用方法に違いがある可能性が指摘された（前田 2019）。また絵馬の図像の面から、「都城型絵馬」のモチーフは絵馬出現期の都城周辺に限られ、地方へは波及せずに、また都城周辺においても短期間に変質することが想定された（前田 2024）。そこで本稿では使用方法の面にあらためて注目し、古代[1)]絵馬祭祀の実態について、とくに近畿地方を中心に検討をおこなう。

Ⅱ．製作技法と分類・編年

（１）文献史料・絵画史料からみた絵馬祭祀

①文献史料

「絵馬」という言葉の文献上の初出は、『本朝文粋』第十三の寛弘９年（1012）６月 25 日の記事である。この記事には、大江匡房が北野天満宮に奉納した物品の目録「北野天神供御弊種々物文」があり、そこに「色紙絵馬三疋」とある。これ以降、『本朝法華験記』巻下を基にした、『今昔物語』巻第十三の天王寺の僧道公にまつわ

る説話で、木の根元に道祖神像とともに置かれる「板ニ書タル」絵馬が登場するなど、絵馬に関する記事が散見される。

また絵馬に関連するものとして、「板立馬」がある。『類聚符宣抄』天歴２年（948）５月勅令に、丹生川上社と貴布禰社に祈雨するにあたり、飼馬料がないので「板立馬」を奉納する、という記述がある。また『北山抄』天暦３年（949）７月 22 日月次祭条に、馬寮から牽進する馬の足腰が立たないため「板立御馬」を献じる、という記述がある。これらの記述から「板立馬」は、生馬の代用とされていたことがわかる。

このように「絵馬」およびそれに類するものに関する記述は、平安時代から確認できる。一方で馬を用いる祭祀は、それ以前から記録がある。

『日本書紀』皇極天皇元年（642）７月 25 日条に、「村々の祝部と徒教の随に、或いは牛馬を殺して諸の神に祭る。或いは頻に市を移す。或いは河伯を禱る。…」（巽 1996）という記述がある。この記事は、民衆による実際の馬を犠牲とする祭祀がおこなわれていたことを示す。

また『続日本紀』文武天皇２年（698）４月９日条に、旱魃のため芳野水分峯神に馬を奉じる、という記述がある。これは国家が神に馬を献上するという、文献上にあらわれる最初の記事であり、これ以降、馬を神に献上するという記事がたびたび見られるようになる。『続日本紀』天平宝字７年（763）には降雨祈願のために黒毛馬を、おなじく『続日本紀』宝亀６年（775）には雨止め祈願のために白毛馬を、それぞれ丹生川上社に奉じるという記述がある。これらの記事は、祈願する目的によって、奉納する馬の種類が異なっていたことを示す。

このように文献史料からは、「絵馬」や「板立馬」に関する記述は平安時代から確認できること、またこれに先行して実物の馬を用いた祭祀がおこなわれていたことがわかる。

②絵画史料

絵馬の使用風景が描かれた絵画史料は、いずれも鎌倉時代以降のものが中心となる。そのため時期差はあるものの、古代の絵馬祭祀の実際を考えるうえで重要な史料となると考える。

絵馬の使用方法を表現した史料として著名なものに、永仁４年（1296）成立の『天狗草紙絵巻』東寺巻がある（図１－１）。ここでは東寺中門回廊にもうけられた祈願所の壁に、絵馬が懸けられている様子が描かれる。また観応２年（1351）成立[2)]の『慕帰絵詞』第七巻第一段では、紀州玉津明神の神木に２枚１対の絵馬が懸けられている様子が描かれる。なおここでは白馬と黒馬が対とされており、これは『続日本紀』などで記述された降雨あるいは雨止め祈願との関連が想起される。このような吊り下げられた絵馬の表現は、平安時代末期に成立した『年中行事絵巻』第十一巻第三段に描かれた今宮神社祭礼の様子や、正安元年（1299）成立の『一遍上人絵伝』第四巻第四段の京都因幡堂の築地塀に懸けられたもの、延慶２年（1309）成立の『春日権現記』第八巻第五段の熱田社社殿扉上に懸仏とともに懸けられている様子（図１－２）などでも確認できる。

一方でこれらの資料とは異なる使用方法の絵馬が描かれた史料も存在する。弘安 11 年（1288）成立の日枝神社所蔵『紙本著色山王霊験記』には、御幣をたてた祭壇下の地面に絵馬が挿し立てられている様子が描かれる。これは『類聚符宣抄』などに記述された、「板立馬」との関連がうかがわれ興味深い。

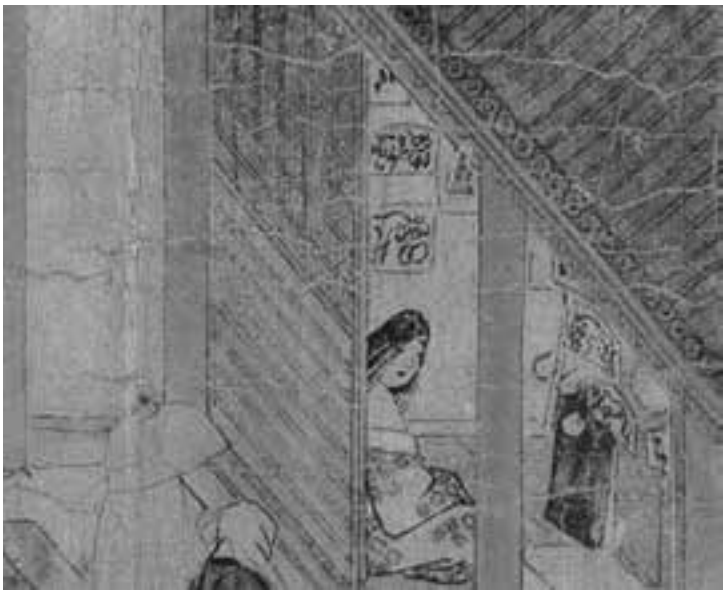
このほかにも 14 世紀の成立とされる『不動利益縁起絵巻』に描かれた、祭壇の天板前面につけられた馬が描かれた紙３枚（図１－３）は、『本朝文粋』中の「色紙絵馬三疋」という記述との関連がうかがわれる。

③文献史料・絵画史料からみた絵馬祭祀

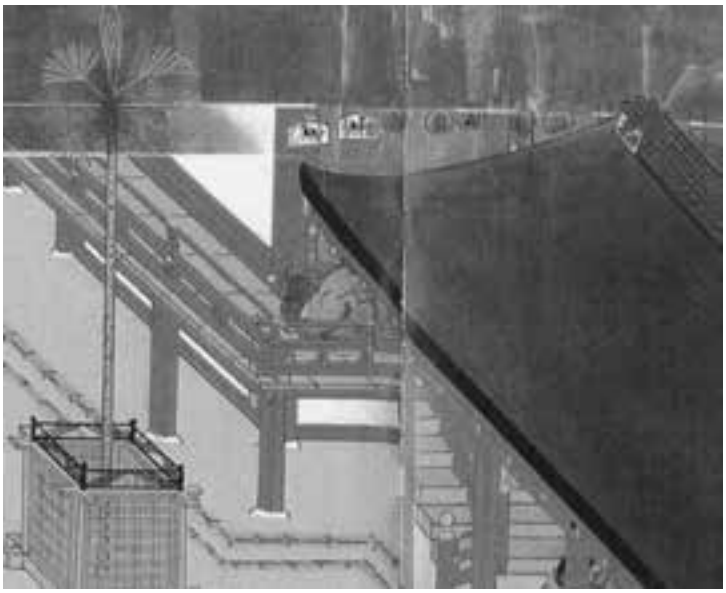
ここまで文献史料および絵画史料にあらわされた絵馬祭祀についてみてきた。絵馬の使用方法については、大きく懸けて使用する方法と挿し立てて使用する方法の２種類が存在する。多くの絵画史料では懸けて使用する絵馬が描かれ、挿し立てて使用する絵馬は稀であることから、少なくとも絵画が描かれた中世以降は、絵馬は懸けて使用されることが一般的であったことがわかる。

また文献史料からは、平安時代の記録には挿し立てて用いた絵馬との関連が想起される「板立馬」がしばしば登場することから、少なくともこの時期には挿し立てて使用する絵馬も一定数存在したと考えられる。

なお絵馬祭祀の誕生は、従来指摘されてきたとおり、生馬献上儀礼の簡略化、代用によるものであることが、



1：『天狗草紙絵巻』東寺巻
【Image：TMN Image Archives】を部分拡大



2：『春日権現記』第八巻第五段
【Image：TMN Image Archives】を部分拡大

3：『不動利益縁起絵』
【Image：TMN Image Archives】を部分拡大

図１　絵画史料における絵馬の表現

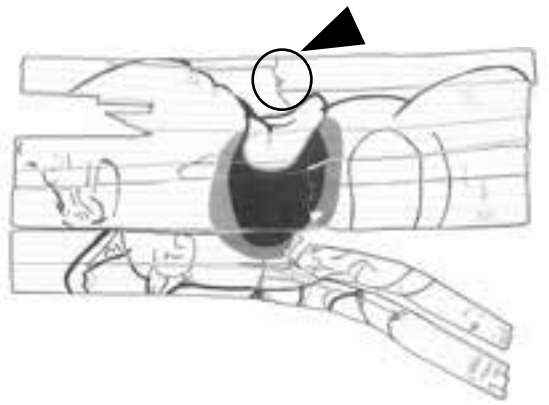


図２　釘を打ち付けた可能性がある絵馬

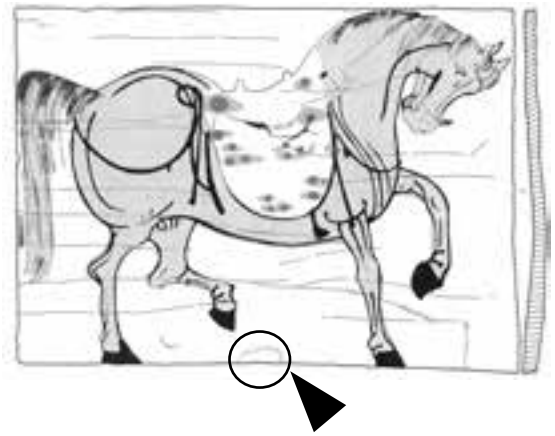


図３　絵馬を挟み込む痕跡

あらためてわかる。

（２）出土史料からみた絵馬の使用方法

ここからは出土絵馬に残された痕跡等から、実際の絵馬の使用法を検討する。

①懸けて使用する絵馬

懸けて使用する絵馬には、絵馬の上端中央に紐等を通すための小孔が穿たれている。このような絵馬の使用痕跡から、絵馬祭祀の実際を復元する。

出土絵馬のなかで、上部の小孔に紐が通された状態で出土した事例はきわめて稀である。伊場遺跡絵馬第１号では、懸垂させるための紐の痕跡がわずかに残るとされる。このような実際に紐が確認できる例はほとんど存在しないが、そのほかの上部に小孔をもつ絵馬は懸垂されることはなかったのであろうか。

この点を検討するため、小孔周辺の擦過痕の有無をみていく。これまでに上部に小孔をもつ古代絵馬は、30点以上確認されている。このうち明確に擦過痕が残ると報告されている事例は確認されていない。一方で時期は下るが、絵画史料では懸けて使用される絵馬が多数描かれている。このことから、この種の絵馬は小孔に紐を通し懸けて使用されていたが、それは擦過痕が残るほどの長時間ではなく、短期間かけられたのちにすぐ外されていたと考えたい。

なお､懸けて使用する絵馬のなかで注目すべきものに、釘を打ち付けたものがある。これまでに実際の古代の絵馬で、釘がささった状態で出土した例は知られていない。しかし難波宮跡では上部の小孔が工具による穿孔ではなく、打ち付けることによって生じたとされる事例が確認されており、これについては釘を打ち付けていたと想定されている（図２）。このような痕跡をもつ絵馬は現状では難波宮跡でのみ確認されているが、今後同様の例は増加する可能性がある[3)]。この釘を打ち付けたと考えられる事例は、上部に小孔をもつ絵馬が懸けて使用されていたことを補強する。

このように上部に小孔をもつ絵馬は懸けて使用されていたが、その使用痕跡からは短期間の懸垂にとどまっていたと考えられる。

②挿し立てて使用する絵馬

上部に小孔が穿たれている絵馬は懸けて使用すると想定されるが、これとは異なる一群の絵馬が存在する。すなわち、上部に穿孔がされないものである。これは絵画資料から、挿し立てて使用する絵馬と考えられる。

挿し立てて使用する絵馬は、棒状のものの先端に絵馬を挟み込むなどして装着し、これを地面に突き刺して使用したと想定される。このことから、挿し立てて使用する絵馬には装着された棒や装具などが組み合うと考えられるが、これまでにその出土事例は知られていない。

この際に絵馬を挿し立てて使用していたのかを判断する材料として、絵馬下部の痕跡が考えられる。具体的には、棒状のものを差し込むための孔や、挟み込むことによって生じる圧痕の有無が想定される。このうち前者については、これまでに確認されていない。一方後者については、注目すべき事例が存在する。平城京二条大路出土例では、絵馬下辺中央付近に摩滅したような痕跡が確

認できる（図３）。この痕跡が、挟み込んだことによって生じたものか断定することはできないものの、その可能性があるものとして注目される。

このように上部に小孔がない絵馬は、出土資料からは明確に断定できないものの、絵画史料を勘案して挿し立てて使用したと考えたい。こちらも懸けて使用する絵馬と同様、長期間ではなく短期間挿し立てたのちに、すぐに外されたと考えたい[4)]。なおこの種の絵馬については、挿し立てる以外にも直接地面などにおいて使用したものも含まれる可能性も考慮する必要がある。

③絵馬における破損行為

絵馬祭祀の実態により迫りうる視点として、絵馬への破損行為がある。絵馬の破損行為とは、文字通り故意に絵馬を傷つける、あるいは割るなどする行為のことである。この破損行為については、馬の殺傷儀礼との関わりで語られるものである。これは贄としての供物、あるいは漢神祭祀における水の汚穢を意図した、屠殺行為を擬制したものである可能性が指摘されている（松尾 2006）。

この絵馬の破損行為が、実史料で確認できるのかみていく。明確に人為的に傷をつけられたとして指摘しうる絵馬は、現状では確認できない。傷のある資料は存在するものの、馬の絵の部分を傷つけて、明確に馬の殺傷を擬した判断できるような史料は確認できない。

ところで遺跡から出土する絵馬は完形の状態で出土することは少なく、一部が欠損している、あるいは接合はできるものの分離しているものが多い。では、これは絵馬の破損行為を示しているのであろうか。確実な破損行為と判断するためには、損壊を目的とした人為的な痕跡が存在するのかが重要である。人為的な損壊の判断基準として、工具などによって損壊した、あるいは損壊しようとした痕跡が明瞭に見て取れるかどうかという点があげられる。木目に沿わない破損状況を示すものも人為的な損壊の可能性があるが、それだけでは意図した破損行為であるか確定できないため、ここでは除外する。また出土時に欠損した状態であるものも損壊行為を示す可能性があるが、これについても二次的な破損の可能性がある。破損行為は、あくまでも人為性の有無が判断基準となる。

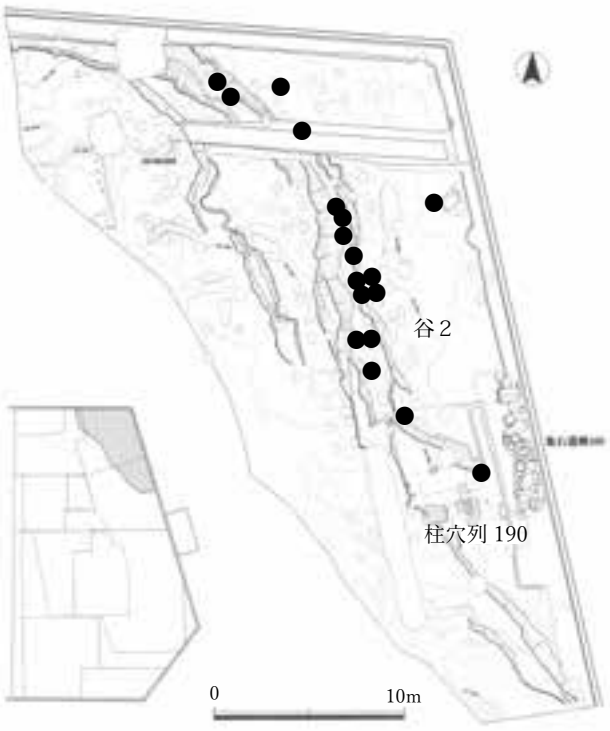
これらを踏まえて、人為的に絵馬を割ったと明確に指摘しうる例は、現状では確認できない。これまでに木目の方向と破損の方向から人為的な破損が指摘されている史料も存在するが、これらについても明確に人為的な破損の痕跡が確認できるわけではない。

このように絵馬の意図的な損壊行為は、従来の指摘のとおり必ずしも絵馬の廃棄方法として一般的なものではなく、むしろ存在したとしてもかなり少数に限られることがみてとれる（松尾 2006）。

④小結

出土絵馬に残された痕跡から、絵馬の実際の使用方法を検討してきた。絵馬には懸けて使用するものと、挿し立てて使用するものの大きく２種類が存在すると考えられるが、いずれについてもその使用時の痕跡を明瞭に確認することは困難である。このことから、基本的には両使用方法ともに長時間懸けたり挿し立てたりはせず、すぐに廃棄されていたものと考えられる。

また絵馬が破損した状態で出土することが多いことにより馬の殺傷儀礼との関連が指摘されることがあるが、



●：絵馬出土地点

図４　難波宮跡谷２絵馬出土状況

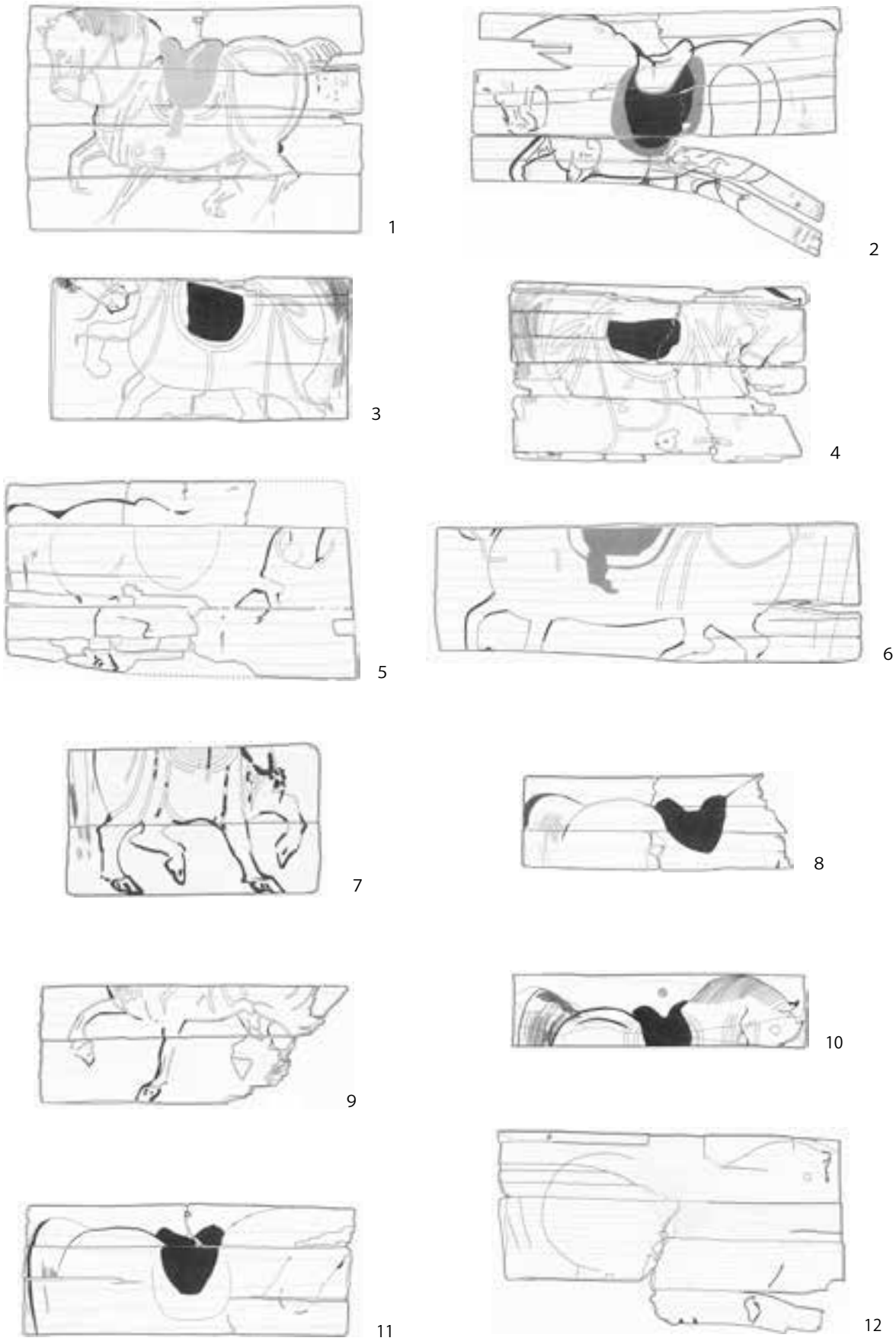


図５　難波宮跡出土絵馬（S=1/4）

現状では絵馬の意図的な損壊行為は、絵馬の廃棄方法として一般的なものではなく、少数に限られると考えられる。

Ⅲ．出土状況からみた絵馬祭祀

ここからは実際の遺跡における出土状況から、絵馬祭祀の実態を検討する。

（１）出土状況からみた絵馬祭祀

①平城京二条大路（奈良県奈良市）

平城京内ではこれまでに５点の絵馬が出土しており、うち３点は宮内での出土である。平城京二条大路出土の絵馬は、平城京内での絵馬祭祀を考えるうえで重要な事例である。

本事例では、二条大路北側溝の北にある東西溝（SD5300）から絵馬が１点出土している。溝は藤原麻呂邸内のもので、溝内からは多量の木製祭祀具や木簡などが出土している。木簡や墨書土器には、天平 11 年（739）や 12 年（740）と記されたものが多い。

②難波宮跡（大阪府大阪市）

これまでに計 34 点の絵馬が出土しているが、これは１遺跡から出土した全国最多の事例である。

絵馬はいずれも宮跡の北西に位置する谷で出土した。谷は東西方向（谷１）と南北方向（谷２）があり、谷１からは３点、谷２からは 31 点もの絵馬が出土している。

谷１は「戊申年（648）」銘木簡とともに出土した絵馬が１点あり、これは現状確認されている日本最古の絵馬である。谷２では西側斜面の法尻から、まとまって絵馬が出土している。絵馬が出土した堆積層は非流水性であることから、比較的至近から谷に投棄あるいは廃棄されたと考えられている（図４・５）。

３点の絵馬が、年輪年代測定により制作時期が判明している。それぞれ天平 10 年（738）＋α、天平宝字３年（759）＋α、天平宝字６年（762）＋αであり、ほかの絵馬もこれに前後すると考えられる。

③日笠フシンダ遺跡（奈良県奈良市）

奈良市の東部山間に位置する。平城京の東方にあたり、光仁天皇陵の南東に隣接する。これまでに計３点の絵馬が出土している。

図６　日笠フシンダ遺跡流路１絵馬出土状況

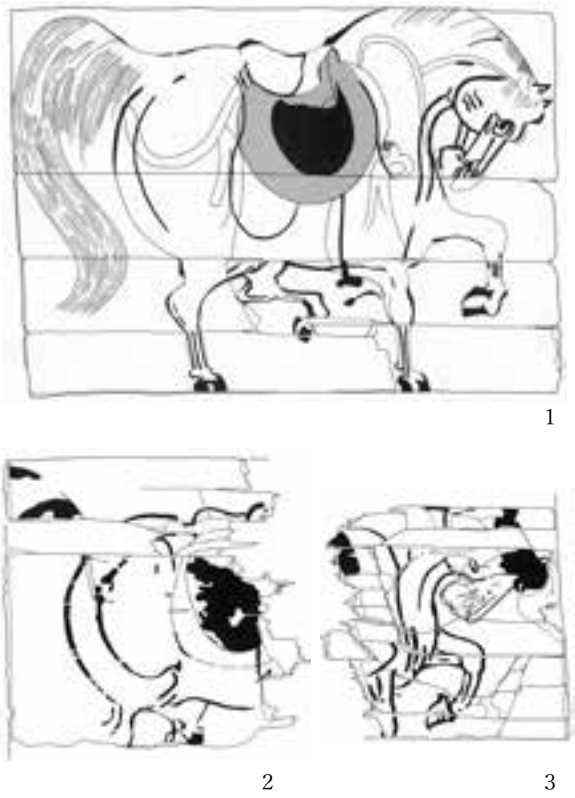


図７　日笠フシンダ遺跡出土絵馬（S=1/4）

絵馬はいずれも流路（流路１）から出土している。流路には木道が架けられており、この木道周辺で「天平十年（738）」銘木簡や斎串とともに、絵馬が出土している。このことから、この木道も祭祀の場としても用いられていたとされる（図６・７）。

日笠フシンダ遺跡では絵馬を含む祭祀遺物は、多くが木道を含む流路１北岸周辺から出土している。このことから流路北岸一体が、祭祀の場として用いられていたと考えられる。

④加美遺跡（大阪府大阪市）

平野川と長瀬川に挟まれた河内低地の自然堤防上に位置する。付近には奈良時代に平城京と難波を結ぶ渋河路がとおり、水陸の交通の要衝であった。ここではこれまでに計５点の絵馬が出土している。

絵馬はいずれも、遺跡内の中・北部を南東から北西へと直線的に流れる、人工水路の大溝中から出土した。大溝からは木製祭祀具や人面墨書土器に加えて硯や銙帯などが出土しており、都城や官衙遺跡などでみられる水辺の祭祀との関係性が指摘されている。祭祀遺物は、大溝の広範囲で複数層位から出土することから、複数回の祭祀がおこなわれたと考えられる。共伴遺物から絵馬の年代は、いずれも８世紀中葉～末葉である。

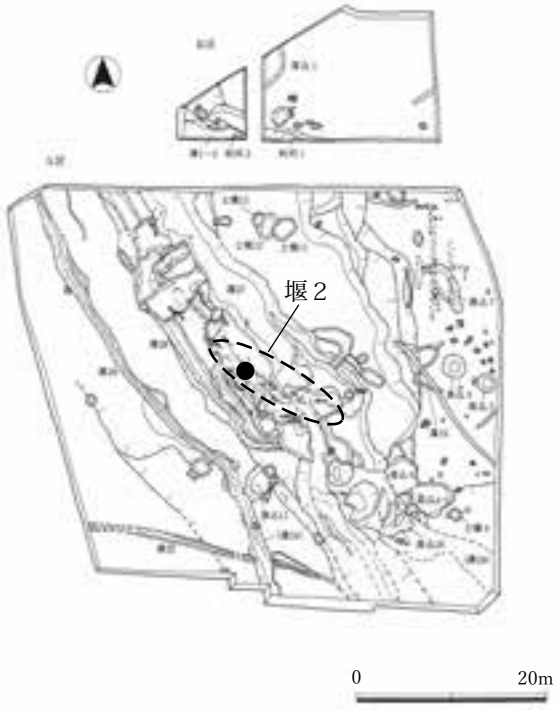
⑤讃良郡条里遺跡（大阪府寝屋川市）

生駒山地から派生する、枚方台地の西麓から低地にかけて位置する。これまでに計２点の絵馬が出土している。このうち１枚には「神馬」の文字が墨書されており、注目される（図９－１：絵馬１）。

絵馬はいずれも溝（溝 27）から出土している。溝には大規模な堰が複数設けられており、地域の幹線水路であったと想定されている。絵馬は溝中の堰（堰２）底面で、人形や木簡、人面墨書土器などとともに出土している（図８・９）。共伴遺物や絵馬１に墨書された「神馬」の書体の特徴から、絵馬の年代は８世紀後半である。

⑥大将軍遺跡（滋賀県草津市）

草津市東部の丘陵部先端に位置する。奈良時代～平安時代の掘立柱建物が 140 棟以上、井戸が 10 基以上確認され、建物の計画的配置がみとめられる。また木簡や墨



●：絵馬出土地点

図８　讃良郡条里遺跡溝 27 絵馬出土状況

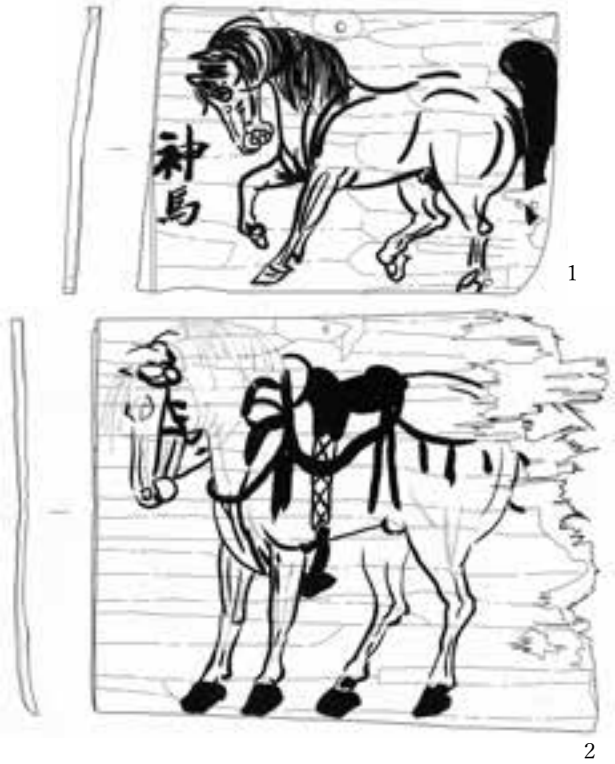
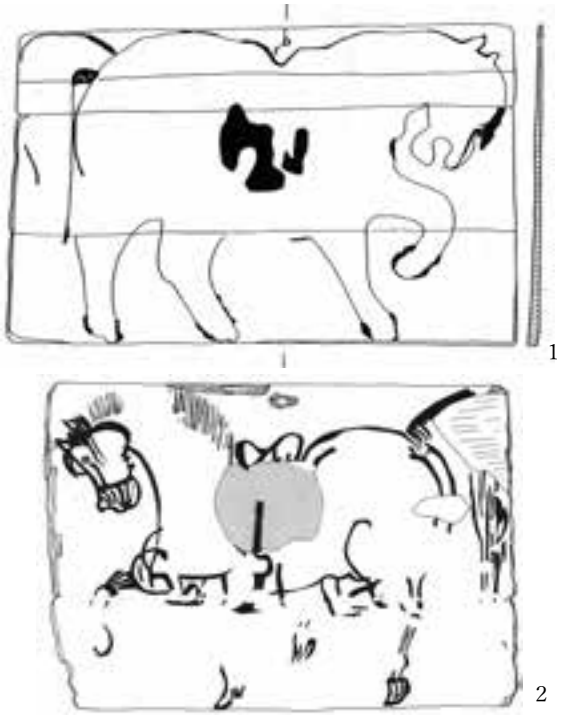


図９　讃良郡条里遺跡出土絵馬（S=1/4）



1：大将軍遺跡　2：十里町遺跡

図 10　近江地域出土絵馬（S=1/4）

書土器、木沓、漆紗冠などが出土し、官衙的な様相が強い遺跡とされている。絵馬はこれまでに１点出土している（図 10 － 1）。

絵馬は井戸（SE １）から出土している。井戸内は最下層に廃棄時の斎串と壺がおさめられ、その後人為的に多量の奈良時代後半の遺物とともに埋め戻されている。共伴遺物から絵馬の年代は８世紀後半以降である。

⑦十里町遺跡（滋賀県長浜市）

琵琶湖北東の姉川水系の三角州上に位置する。縄文時代晩期～平安時代後期の集落遺跡である。絵馬はこれまでに１点出土している（図 10 － 2）。

絵馬は土坑（SK １）から出土している。絵馬は土坑の最上層から、奈良時代末の須恵器とともに出土している。共伴遺物から絵馬の年代は８世紀後半である。

（２）出土状況からみた絵馬祭祀の類型化

遺跡での絵馬の出土状況は、一連の祭祀行為の最終段階で、絵馬が廃棄された姿を示す。そのため一連の絵馬祭祀のごく一部のみを示すにすぎないが、祭祀の内容を検討するうえでは重要である。ここではおもに絵馬の出土遺構およびその想定される使用方法から、絵馬祭祀の類型化をおこなう。

絵馬が出土する遺構は大きく、溝・流路のような開放された遺構と、井戸や土坑のような閉鎖された遺構に分類される。この遺構の性格の違いは、絵馬祭祀最終段階における絵馬の取り扱いの差異に基づく。すなわち廃棄された絵馬が廃棄された地点から移動するのか、それともその地点にとどまるのかという差異がある。これは廃棄後の絵馬を遠ざけようとする意図があるのか、あるいはその場にとどめておくという意図があるのかという点につながると考える。

またこれに加えて、遺構の性格を分類する視点として、水との関わりがあげられる。律令的祭祀にかかわる遺物は祓にかかわると考えられ、運河や道路側溝などといった場所を中心に出土し、ここには遺物を流すという意識が働いていたとされる（金子 1985 など）。また先ほどの廃棄された絵馬の移動という観点からも、この水との関係は重要で、水流によって廃棄された絵馬が移動していくことを意図しているかにもつながる。

この視点からは溝・流路および井戸は水との関係が濃密な遺構、土坑は水との関係が希薄な遺構となる。ただし井戸に関して、井戸の廃絶後にほかの遺物ともに廃棄されている事例については、水との関係が希薄であり、注意が必要である。なお多量の絵馬が出土した難波宮跡北西の谷は開放された遺構であり、また水との関係が希薄な遺構である。

これらの絵馬出土遺構の要素を組み合わせると、開放されて水と密接な遺構（溝・流路：Ａ類）、開放されて水と密接ではない遺構（谷地形：Ｂ類）、閉鎖されて水と密接な遺構（井戸・井泉：Ｃ類）、閉鎖されて水と密接ではない遺構（井戸・土坑：Ｄ類）の４種類に分類される。これらのうちＣ類は先にも述べたように、井戸廃絶後に廃棄土坑の役割としているものは含まない。

これにこれまでみてきた、懸けて使用するのか、挿し立てて使用するのか、という祭祀時における使用方法を随時加味して、絵馬の使用方法を類型化する。この各類型をもとに、絵馬祭祀の地域性とその変遷を検討する。

Ⅳ．絵馬祭祀の地域性と変遷

ここまで、実際の遺跡における絵馬の出土状況を基に、絵馬祭祀の類型化をおこなった。絵馬祭祀には複数の形

態が存在したことが想定されたが、この要因としては地域性や時期差などが可能性としてあげられる。そこで、本章ではこの点を検討する。

（1）絵馬祭祀の地域性

近畿地方で最もよくみられる絵馬祭祀の形態はA類である。A類の絵馬祭祀は平城京およびその周辺や大阪平野でも確認できる。また都城からは距離がやや離れる但馬でも事例が確認される（深田遺跡：兵庫県豊岡市）。このように平城京とその周辺、大阪平野ではA類の祭祀が主流であったことがわかる。

一方B類の絵馬祭祀は、近畿地方ではこれまでに難波宮跡でのみ確認されている。このように、近畿地方の絵馬祭祀の多くがA類またはB類に分類され、開放された遺構でおこなわれる祭祀が一般的であったことがわかる。

このほかに近畿地方で確認されている絵馬祭祀の形態は、D類である。平城京とその周辺および、平安京、そして近江に分布する。出土事例の多い大阪平野では、この類型はこれまでに確認されていない。

このように近畿地方において、絵馬祭祀の形態が地域によって異なるということがわかる[5)]。この地域性の差異を、次に時期差という視点からみていく。

（2）絵馬祭祀の変遷

近畿地方では8世紀前半に絵馬祭祀がおこなわれるようになる[6)]が、この時期には平城京とその周辺および難波宮跡で絵馬が出土する。これらは前者ではA類、後者ではB類の祭祀がおこなわれる。このように、この時期には宮都およびその周辺で、開放された遺構で絵馬祭祀がおこなわれていたことがわかる。そしてこれは、日本における絵馬祭祀の初源が、宮都とその周辺でおこなわれる開放された空間である溝や流路、谷地形に、絵馬を最終的に投棄するという形態であったことを示す。これはかつて指摘された「都城型絵馬」（江浦 2006）の存在を加味すると、この段階で一つの完成された「都城型絵馬祭祀」ともいうべき、絵馬の祭祀形態が存在したのかもしれない。

8世紀後半になると、様相が変化する。この時期には

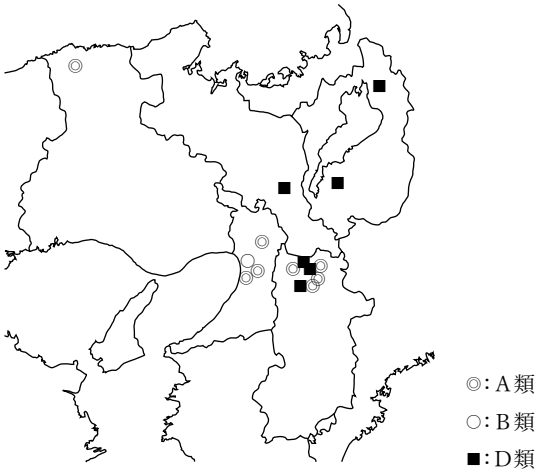


図11　近畿地方における絵馬祭祀の諸形態の分布

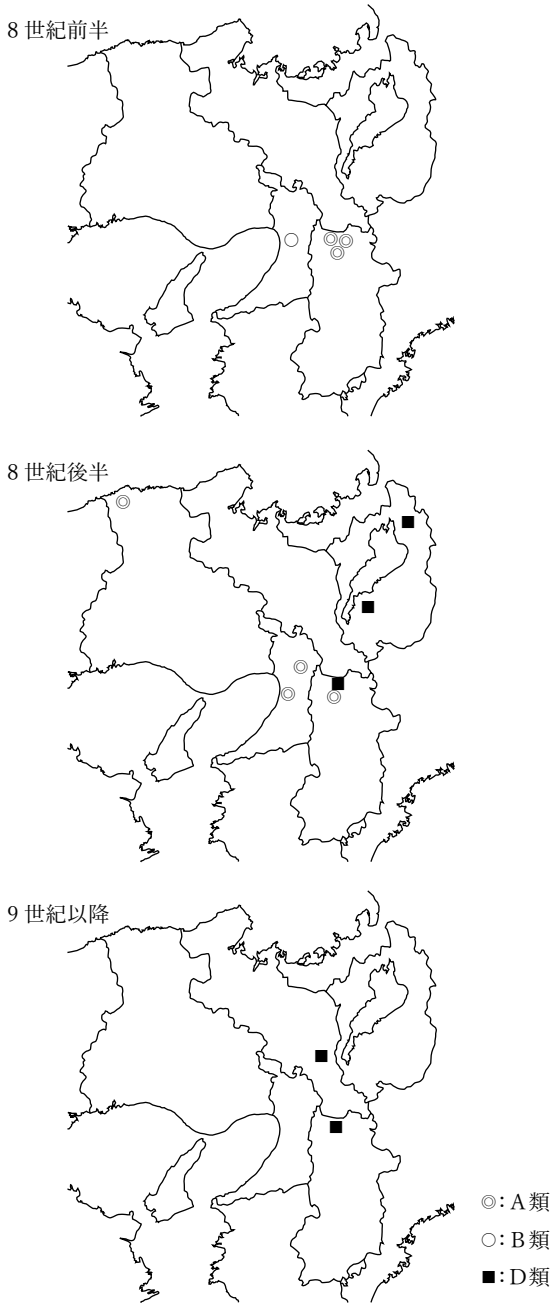


図12　絵馬祭祀形態の時期的変遷

引き続きＡ類の絵馬祭祀がおもに大和、河内、摂津でおこなわれているが、これに加えてＤ類の絵馬祭祀も確認される。このＤ類の絵馬祭祀の注目点は、確認されている場所が平城宮内に加えて、あらたに絵馬祭祀が拡大した近江である点である。宮都から離れた地域では、絵馬祭祀の様式までは伝わらなかった可能性がある。なおこの平城宮内裏出土例は、絵馬が器種不明の器物に転用された後に廃棄土坑に廃棄された事例であり、注意が必要である。

そして９世紀以降になると、近畿地方では出土絵馬の事例が極端に減少する。祭祀形態はいずれもＤ類となり、Ａ類の絵馬祭祀は姿を消す。

ここまで近畿地方における絵馬祭祀の変遷を、時期ごとにみてきた。この変遷がどのような背景のもと生じるのか、実際の絵馬祭祀の内容を復元し、検討する。

Ｖ．使用方法からみた古代絵馬祭祀

（１）出土形態からみた絵馬祭祀

前章では絵馬の出土形態を、大きく４種類に分類した。ここではこれをもとに、実際にどのような絵馬祭祀がおこなわれていたのか検討する。

近畿地方で多くみられる絵馬祭祀の形態は、おもにＡ類とＤ類である。そこで、ここではこの２類型について復元をおこなう。

Ａ類の祭祀のおこなわれた場所は、絵馬が出土した近辺であると考えられる。絵馬の出土状況が投棄を示すものがあり、移動していても長距離の移動ではないと考えられる。また橋脚などの付近に他の祭祀遺物とともに集中して出土する事例もあり、祭祀の場所であったことを示すものと考えられる。

次にＤ類の祭祀であるが、こちらの祭祀は、絵馬が出土する土坑などとは異なる場所で挙行されていたと考えられる。この形態の祭祀では懸孔をもつ絵馬が使用されている事例が多いことからも、祭祀の場所と絵馬の廃棄の場所は異なると考えられる。

では、絵馬祭祀の実際の内容はどのようなものであったであろうか。このことを考える際に有用となると考えられるのが、Ａ類の絵馬祭祀である。Ａ類の祭祀は、絵馬出土地付近が祭祀の場であった可能性が高いと想定した。そこでＡ類の祭祀の状況から、さらに検討を試みる。

日笠フシンダ遺跡では木道付近で絵馬がほかの祭祀遺物とともに出土しており、この木道が祭祀の場であったと想定されている。絵馬とともに、斎串や人形、舟形木製品、陽物形木製品などが出土している。このように日笠フシンダ遺跡では、木道から絵馬を含めた祭祀遺物を投棄する祭祀がおこなわれていたことがわかる。

加美遺跡では、絵馬は人工水路である大溝中から出土した。大溝の複数地点で祭祀関連遺物が出土しており、このうち絵馬２点は、人形や人面墨書土器とともに、また絵馬３点は、人面墨書土器とともに出土している。このほかにも絵馬をともなわず、多数の祭祀遺物が出土している。このように加美遺跡では大溝で継続的に絵馬祭祀がおこなわれている。加美遺跡で注目される点に、懸孔のない絵馬とともに、懸孔をもつ絵馬が使用されていることがあげられる。現状では大溝周辺で絵馬を懸けていたと想定される構造物は確認されていないが、出土遺物から官衙的な性格が指摘されており、注意が必要である。

またＢ類の難波宮跡北西谷では、谷の西側斜面の法尻から広い範囲で絵馬が出土している。絵馬は木簡や斎串などの木製品とともに出土する。このように難波宮跡では谷全体で、木簡や斎串とともに絵馬の投棄がおこなわれていたことがわかる。広範囲での絵馬の出土および絵馬の年輪年代から、絵馬祭祀は一度のみではなく、複数回おこなわれたと考えられる。なお難波宮跡でも懸孔のない絵馬とともに、懸孔をもつ絵馬も出土している。谷２南岸で東西方向の柱列（柱穴列 190）が検出されており、後期難波宮の北限を示す可能性が示されている。宮の北限部分の外側で絵馬祭祀をおこない、この際に北限の柵列に絵馬を懸けて使用した可能性も考慮に入れたい。

ここまで実際の遺跡における絵馬の出土状況を、あらためてみてきた。『延喜式』左右京職大嘗大祓条では、「凡踐祚大嘗大祓所須馬一疋。剣九口。鍬九口…官人率坊令坊長姓於羅城外。」とある。また『法曹類林』巻二百所引式部文では、「六月十二月晦。百官会集。大祓儀。…於大伴壬生二門間大路各有常儀。…神祇官主典。馬寮陳祓物祓馬。…」とある（下線いずれも筆者）。これらはいずれも大祓に関する記述である。これらからは、大祓は門前や道路などの開けた空間でおこなわれ、儀式に際

して馬が重要視されていたことがわかる。

また先にみた『法曹類林』巻二百所引式部文では「其日平旦大蔵木工掃部。帳幄鋪節。」という記述はあるものの、多くの場合で祓所そのものに関する記述は少なく、大々的に施設は設けず、門前や道路などの開けた空間でおこなったと考えられる。この文献の記述内容をもとに、あらためて遺跡における出土状況をみる。

日笠フシンダ遺跡では木道が祭祀の場であったと考えられるが、木道以外に祭祀に関わると想定される遺構は確認されない。柱穴が２基確認されており、祭場の遮蔽のための可能性が想定されているが不明確である。また難波宮跡では北西谷の岸部分が祭祀の場であったと考えられるが、祭祀のための明確な遺構は確認されていない。このことから文献の記述から推察されるように、これらＡ類の絵馬祭祀は、大々的に祭場を設けずに挙行されていたと考えられる。これをもとに、Ｄ類の絵馬祭祀についてもその内容について検討を試みる。

Ｄ類の絵馬祭祀では、絵馬は最終的に土坑や井戸に投棄される。この際投棄された絵馬は、懸孔をもつものである。絵馬が出土した遺構周辺には、いずれも柱穴などは検出されておらず、絵馬を懸けていたと想定される場所が付近にはない。このことから、この類型の絵馬祭祀では、絵馬祭祀の終了後に祭祀の場所に投棄するのではなく、あらためて別場所の廃棄土坑などに廃棄していることがわかる。

Ｄ類型の絵馬祭祀は、絵馬の出土遺構が絵馬の祭祀場所ではないと考えられ、また共伴遺物も多量の遺物が一括して投棄される様相を示し、絵馬祭祀にかかわるもののみを抽出することができない。このことから、祭祀の具体的な内容を復元することは困難である。ただ、Ａ類型の絵馬祭祀でおこなわれていた、絵馬を祭祀の場で投棄して祭祀が終了するという行為が、おこなわれなくなっているということを指摘することができる。

（２）絵馬祭祀の地域的・時期的変遷とその背景

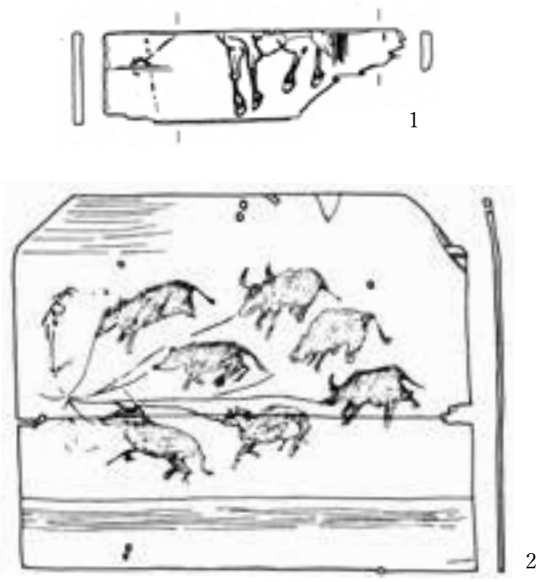
近畿地方において絵馬祭祀が積極的におこなわれる８世紀前半では、溝や流路などの開かれた空間に祭祀の場を設け、最終的にその場で絵馬を斎串や人形などの祭祀具とともに投棄し、流す祭祀がおこなわれる。この祭祀は、宮都およびその周辺でおこなわれる。このような絵馬祭祀では、「都城型絵馬」（江浦 2006）をともなうことが多い。このことから当該期の初期絵馬祭祀は、一定の規範がみとめられる。

引き続き８世紀後半は、絵馬祭祀は宮都およびその周辺に加え、近江地域でもみとめられる。絵馬祭祀は前段階と同様の内容が一般的であるが、絵馬祭祀の内容に変化がみられる。

９世紀以降になると、絵馬祭祀の分布、内容ともに大きく変化する。これまで宮都およびその周辺が祭祀の中心であったが、この時期には下火となり、近畿地方全体で絵馬祭祀が減少する。これは絵馬祭祀のもつ意味の変質をしめすのであろうか。今後の課題としたい。

このように８世紀前半に宮都で生み出された絵馬祭祀は、使用される絵馬や祭祀形態から一定の規範があったと考えられる。これは「都城型絵馬祭祀」ともいうべきものである。８世紀後半には絵馬祭祀は近江地域など畿内地域周辺へと広がりをみせるが、祭祀の内容は変化がみられるようになる。９世紀以降、絵馬祭祀は分布、内容の両面で大きな変化を見せる。従来絵馬祭祀の中心地であった宮都およびその周辺では絵馬祭祀が下火となる。また絵馬祭祀の内容についても、宮都周辺でおこなわれていた前段階のものから変化する。

絵馬祭祀は８世紀前半に宮都で生み出されて以降、一定の規範をもったかたちで周辺へと広まっていった。し



１：若江遺跡　２：岩倉城跡

図 13　中世の出土絵馬の例（S=1/4）

かし短期間で、宮都周辺では絵馬祭祀は下火となり、代わってその周辺で挙行されるようになる。

Ⅵ．まとめ

（１）使用方法からみた近畿地方における古代絵馬祭祀

出土絵馬から復元される使用方法をもとに、近畿地方における古代絵馬祭祀の様相をみてきた。古代において絵馬祭祀は、８世紀前半に宮都およびその周辺で執りおこなわれるようになる。その内容は溝や流路などの開かれた空間に祭祀の場を設け、最終的にその場で絵馬を投棄し、流す祭祀である。この状況は、絵馬祭祀の広がりを見せながら、８世紀後半まで継続する。なかでも８世紀前半に宮都周辺でおこなわれた絵馬祭祀は、使用される絵馬の図像や祭祀内容の共通性から、「都城型絵馬祭祀」としてひとつの絵馬祭祀の様式としてくくることができる可能性がある。

その後、絵馬祭祀は大きく変化する。これまでの祭祀とは異なり、絵馬は祭祀終了後に祭祀の場所に投棄するのではなく、あらためて場所を移し廃棄土坑などに廃棄されるようになる。従来の絵馬を祭祀の場で投棄して祭祀が終了するという行為が、おこなわれなくなる。

ここまで使用方法の観点を中心に、近畿地方における古代絵馬祭祀の様相をみてきた。このような絵馬祭祀が地方へ伝播していくに際し、どのような変化が起こるのか検討する必要がある。これを明らかにするには畿外における絵馬祭祀の事態を明確にし、畿内における様相と比較することが必要である。

絵馬の図像の面から、「都城型絵馬」のモチーフは絵馬出現期の都城周辺に限られ、地方へは波及しないことが想定された（前田 2024）。この点との比較も必要である。都城のある畿内と他地方の様相を明らかにし、両者を比較することによって、古代における絵馬祭祀の全体像がより明らかになる。今後の課題としたい。

（２）古代から中世への絵馬祭祀の変化に関する予察

ここまで近畿地方における古代絵馬祭祀を、使用方法の観点から検討してきた。最後に中世以降の絵馬祭祀との関連を予察し、本稿のまとめとする。

中世の出土絵馬はこれまでに４例確認されている（図13）。このうち近畿地方出土は１例である。若江遺跡出土例は若江城の堀（溝５）から出土しており、時期は15 ～ 16 世紀である。中世になるとあらたに城跡からの出土例がみられるようになる（愛知県岩倉市岩倉城跡など）。

中世の絵馬史料なかで特筆すべきものに、伝世品があげられる。秋篠寺（奈良県奈良市）では５点の絵馬が、現在の本堂の天井裏から発見された。絵馬はいずれも小型品で、上部に紐を通す小孔があけられている。絵馬上部が残存するものは山形に丸みをもち、古代の絵馬とは形状が異なる。このうち黒駒絵馬は「應永」銘をもち、応永年間（1394 ～ 1428）の年代が与えられる（平田 1965）。

當麻寺（奈良県葛城市）では５点の絵馬が、曼荼羅堂（本堂）の天井裏から発見された。描かれた図像自体は、ごく単純な略画である。こちらもいずれも小型品で、上部に紐を通す小孔があけられている。上部が残存するものは山形に丸みをもつ。年代が記されたものはないが、板の作り方などから室町時代をくだらないものとされる（元興寺仏教民俗資料研究所 1972）。

最初に検討をおこなった絵馬を表現した絵画史料は、いずれも中世のものである。そのため中世における絵馬祭祀の実態を表現していると考えられる。これらの史料に描かれている絵馬をあらためてみると、大部分が懸けて使用されており、絵馬上部は山形に丸みをもつ。これは伝世史料の特徴とも一致し、絵画史料の写実性がうかがわれる。

室町時代以降絵馬は漸次大型化し、扁額型式のものがあらわれる。これらの絵馬の変化から、建物内で祭祀をおこない、絵馬は長期間懸けられるようになり、古代でみられた廃棄までを一連の祭祀とし、また廃棄までの期間も短い祭祀は姿を消していくと考えられる。

絵馬を懸ける場所が誕生し、これが絵馬堂となる。現存する最古の絵馬堂は、慶長 13 年（1608）に建てられた北野天満宮（京都府京都市）の絵馬堂である。

このように古代の絵馬祭祀は、中世には大きく変化したことがわかる。そして、この中世に確立した絵馬祭祀が現代にまで続き、多くの寺社で使用されるなど社会に根付いている。

ｉ）橿原考古学研究所　まえだ としお

註

１）本稿では古代を平安時代以前とし、鎌倉時代以降を中世として取り扱う。

２）『慕帰絵詞』自体の成立は観応２年（1351）であるが、第七巻のみは文明 14 年（1482）に描かれている。

３）13 世紀後半の史料であるが、安雲山田遺跡（福岡県上毛町）出土絵馬は左右の短辺に、３個の小孔が縦方向穿たれる。これは懸けるのではなく、建物に直接打ち付けていた痕跡とされる。

４）一方で、平城京二条大路出土絵馬は、風蝕の痕跡があるとされ、長時間外気にさらされていたとされている。これは、絵馬下部に挟み込んだような痕跡が残されていることとも関連すると考えられる。この事例についてはさらなる検討が必要である。

５）近畿地方では、現状でＣ類の祭祀形態は確認されていない。Ｃ類は鹿田遺跡（岡山県岡山市）などの事例が知られている。

６）近畿地方で確認されている最古の絵馬は、難波宮跡谷１から「戊申年（648 年)」銘木簡とともに出土した絵馬である。現状で同時期のものはこれ以外には知られておらず、他例と比較しても時期が特別に古い。比較対象となる史料が存在しないことから、ここでは除外する。

参考文献

岩井宏實　1974『ものと人間の文化史　絵馬』法政大学出版局

江浦洋　2006「難波宮跡北西部出土の絵馬」『大阪城址Ⅲ』大阪府文化財センター　pp. 510-519

金子裕之　1985「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第７集　国立歴史民俗博物館　pp. 219-289

元興寺仏教民俗資料研究所（編）　1972『当麻寺民俗資料緊急調査報告書』

巽淳一郎　1996『日本の美術第 361 号　まじないの世界Ⅱ』至文堂

平田寛　1965「秋篠寺新出の絵馬」『大和文化研究』第 10 巻第２号　大和文化研究会　pp. 25-27

北條朝彦　2009「古代「絵馬」祭祀論―難波宮跡北西部と奈良県日笠フシンダ遺跡から出土した「絵馬」を中心に―」『續日本紀研究』第 381 号　續日本紀研究会　pp. 17-28

北條朝彦　2021「絵馬」『馬と古代社会』八木書店　pp. 177-198

前田俊雄　2019「日本出土絵馬の基礎的研究」『考古学論攷』第 42 冊　奈良県立橿原考古学研究所　pp. 35-50

前田俊雄　2024「図像からみた古代絵馬の特質―出土絵馬を中心に―」『古代学と遺跡学』坂靖さん追悼論文集刊行会　pp. 433-440

松尾充晶　2006「出土絵馬の評価」『青木遺跡Ⅱ（弥生～平安時代編)』島根県教育委員会　pp. 551-570

水野正好　1978「まじないの考古学・事始」『季刊どるめん』18 号　萩書房　pp. ５-24

水野正好　1983「馬・馬・馬－その語りの考古学」『文化財學報』第２集　奈良大学文学部文化財学科　pp. 24-43

図出典

図１　東京国立博物館　image:TMN Image Archives

図２　江浦洋（編）2006『大阪城址Ⅲ』大阪府文化財センターを改変

図３　奈良国立文化財研究所（編）1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告書』を改変

図４・５　江浦洋（編）2006『大阪城址Ⅲ』大阪府文化財センターを改変

図６・７　清水昭博（編）2011『日笠フシンダ遺跡』奈良県立橿原考古学研究所を改変

図８・９　長戸満男（編）2004『讃良郡条里遺跡（その１)』大阪府文化財センターを改変

図 10　１：楠部博世 2000「大将軍遺跡（第 11 次)」『平成 10 年度草津市文化財年報』草津市教育委員会　２：森口訓男（編）2003『団体営圃場整備事業関連遺跡調査報告書』滋賀県長浜市教育委員会

図 11・12　筆者作成

図 13　１：三好孝一（編）1996『巨摩・若江北遺跡５次』大阪府文化財調査研究センター　２：愛知県埋蔵文化財センター 1992『岩倉城遺跡』